

# 平成 15 年度第 1 回韓国現地調査結果の概要

独立行政法人農畜産業振興機構  
平成 16 年 1 月 23 日

---

## 韓国の野菜生産、輸出等の動向

---

### 調査結果の要旨

平成 15 年 11 月 27 日(木)～12 月 5 日(金)に行った、生鮮野菜輸出先国生産出荷動向等調査事業に係る平成 15 年度第 1 回韓国現地調査の概要を報告する。

今回の調査では「きゅうり、トマト、パプリカ、すいか」を主体に行い、ソウル広域市、忠清南道、全羅北道、慶尚北道、慶尚南道の主産地の農協、生産法人、生産者等の聞き取り調査を行った。

韓国から日本への生鮮野菜の輸出は、パプリカ以外の主要品目で 2001 年を境に大きく減少している。その要因として、日本企業側からの需要量の減少、また韓国国内価格が作柄不良等により 2 年連続で堅調であったこと、更に日本から要求される農薬管理、栽培記録の開示等に係る労働力と輸出価格の低下が、生産者にとって負担となり輸出への意欲が減退していることなどが挙げられる。

輸出野菜を栽培している生産者は、ほぼ 100%が施設栽培を行っており、これまで国や自治体からの補助や融資により施設設備を行ってきた。しかし過剰投資による自己負担分の返済は相当額にのぼり、返済のために、生産者は国内と輸出価格のバランスにより出荷先を調整する傾向がある。

その中で、輸出量が増加しているパプリカは、高級デパートや欧風料理用にと国内消費量が増加しているものの、生産量のうち 90%以上が日本へ輸出されることから、韓国国内における生産量の増加は、そのまま輸出数量の増加へとつながっている。生産量の増加は主に栽培技術の向上による単収の増加、今まで端境期であった 7 月～9 月の出荷量が高冷産地における作型の普及により増加したこと等が挙げられる。2003 年は 4 月に発生した残留農薬問題により 5、6 月の輸出数量が一時的に減少したものの、農林部及び国立農産物品質管理院は登録制を実施し、生産者及び輸出業者に対して ID の発行をするなどの管理体制を整え、その後の輸出数量は回復をしている。

# 調査行程



## 調査品目の概要

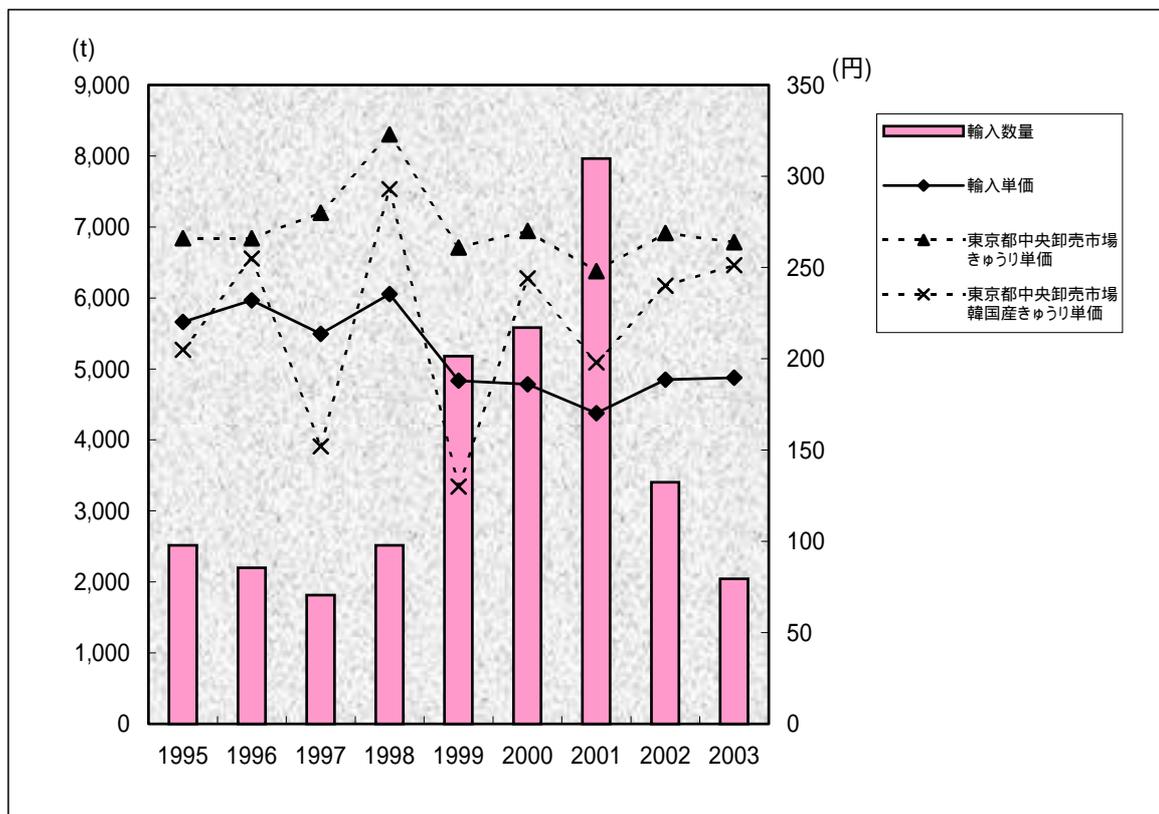
### [きゅうり]

韓国における施設きゅうりの主要産地は、江原道春川市、慶尚南道昌寧郡・光陽市、全羅南道順天市であり、日本への輸出主要産地は、韓国南部地域の順天市、光陽市である。

生鮮きゅうりの日本への輸出は、2001年を頂点として減少傾向にある。現地調査においても、日本輸出向けきゅうりの栽培面積の減少したとのこと。

日本への輸出は、主に11月～翌年2月が中心で、調査実施時は出荷初期であった。本年産のきゅうりの作柄は、2002年末から2003年初頭の日照不足及び寒さによる被害があった時と比較して順調であり、平年並みであった。

輸出単価は、2002年まで下降傾向であったが、2003年は冬から春にかけての日本市場の野菜価格の好調と韓国市場の野菜価格の好調により横ばいであった。



資料：独立行政法人農畜産業振興機構「V I N A S」、原資料：財務省「貿易統計」

東京都中央卸売市場「市場年報」

## [トマト]

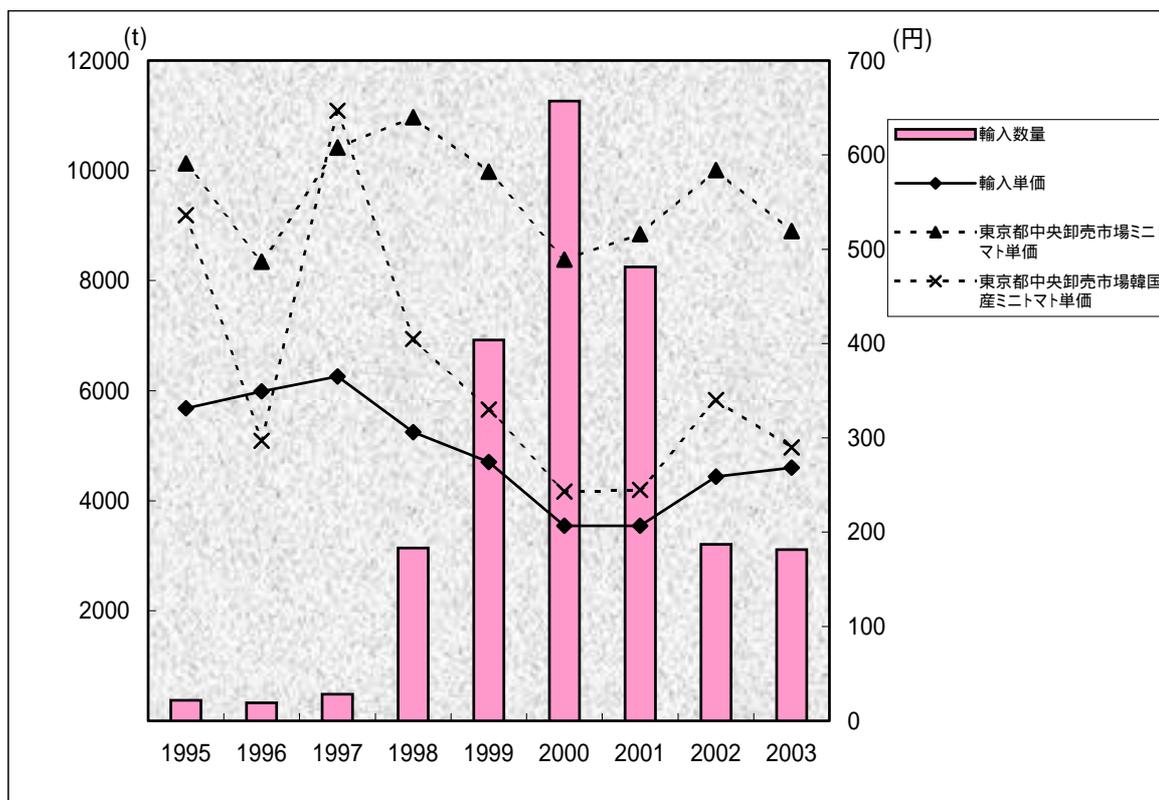
韓国における施設トマトの主要産地は忠清南道扶余郡、全羅南道羅州市・光州市、慶尚南道宝城郡・金海市、釜山広域市等であり、施設割合は95%で、主に韓国南部に位置する慶尚南道からが多い。

生鮮トマトの輸出数量は、2000年をピークとして2003年まで減少傾向であった。

日本への輸出トマトのほとんどはミニトマトである。韓国国内のミニトマトの栽培面積は減少傾向にある。調査した産地ではミニトマト栽培面積の減少の報告はなかったものの、農水産物流通公社及び韓国農村経済研究院の聞き取り調査では、ミニトマトから丸トマトへの品目転換が進んでいるようである。これはマスコミ等で健康食品として取り上げられたことにより、丸トマトの人气が韓国で高まっており、需要量が多くなったことによる等のこと。

2003年は、9月に上陸した台風16号(韓国では「メミ」と呼ばれている)により、慶尚南道や釜山市のビニールハウスの倒伏や浸水等があったということだが、時期が定植前であったこともあり、現在は復旧が既に済んでおり生育状況は順調であった。

輸出単価は2001年まで下降傾向であったが、2002年259円、2003年268円とやや上昇した。



資料：独立行政法人農畜産業振興機構「VINAS」、原資料：財務省「貿易統計」、東京都中央卸売市場「市場年報」

## [パプリカ]

韓国におけるパプリカの主要産地は全国に点在しており、京畿道華城郡、全羅北道金堤市、慶尚南道昌寧郡等がある。

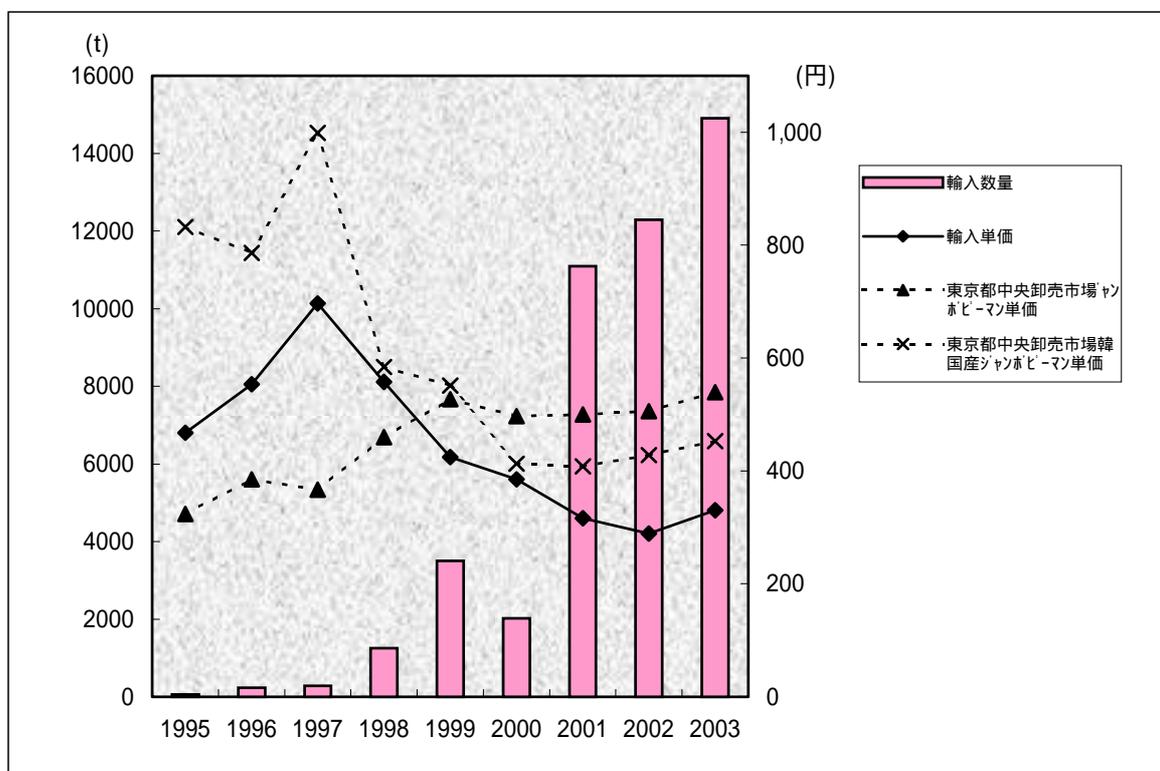
生鮮パプリカの日本への輸出は年々増加している。2002年の輸入実績は12,290t、2003年14,905tとなり、昨年同時期比で121%であった。

輸出単価は1996年以降下降傾向であったが、2002年289円、2003年11月現在で333円と上昇した。

韓国の輸出数量の増加は、以前は端境期であった7月～9月の出荷が、高冷産地における半促成栽培の作型の普及と栽培技術の向上による単収の増加が一要因であるとのこと。

2003年度の作柄は、昨年度の冬期における低温、日照不足により生産量が減少し、生育もよくなかった。本年産は、聞き取り調査を行った時は出荷初期であったが、韓国の中西部では11月中旬まで日照不足があり、第2果、第3果に落果が見られていることから、2004年の1、2月の収穫量は減少し、輸出数量も減少するのではとのこと。韓国南部地域は平年並みで概ね良好である。

2003年4月に韓国産パプリカに残留農薬問題が発生により、4、5月の輸入数量が減少した。このことに対処するために、韓国農林部及び国立品質管理院ではパプリカ生産者及び出荷団体に対して登録制を実施した。各生産者にはIDが配布され、出荷箱ごとにラベルが添付されるようになった。



資料：独立行政法人農畜産業振興機構「V I N A S」、原資料：財務省「貿易統計」

東京都中央卸売市場「市場年報」

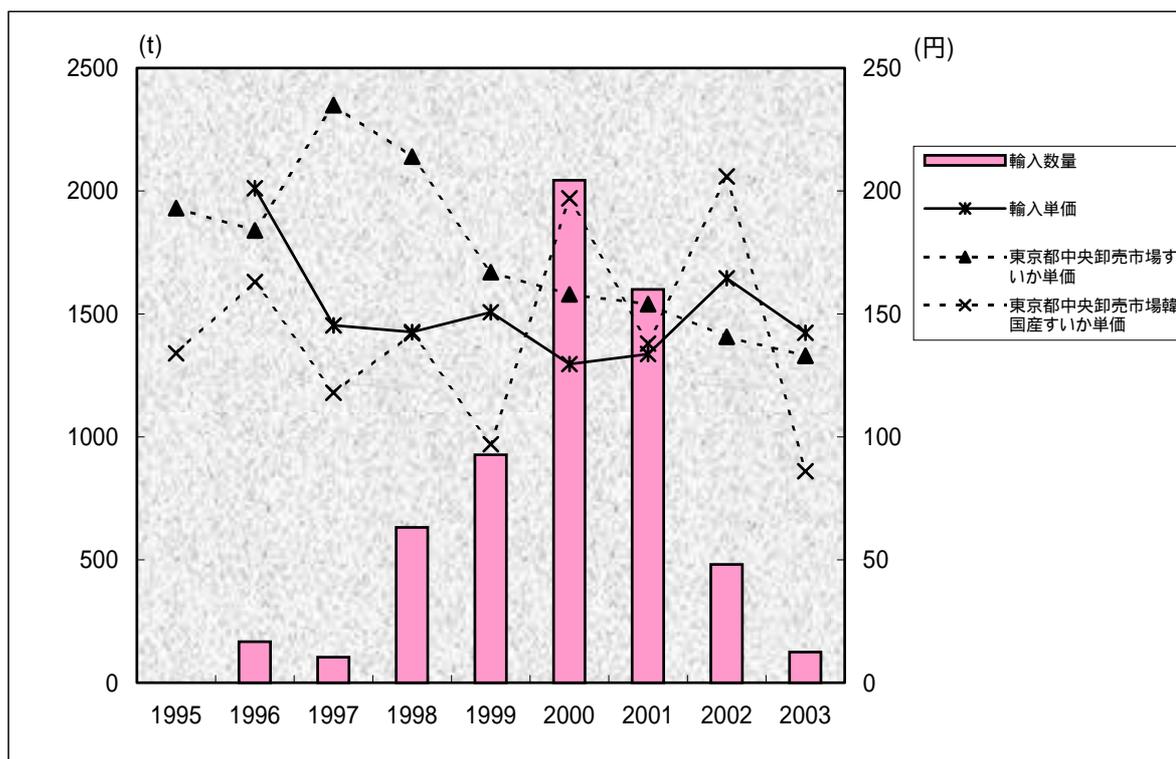
[すいか]

韓国における施設すいかは、慶尚南道威安郡・宜寧市・晋州市・昌原市等があり、南部地域に集中している。露地すいかでは、全羅北道の高昌市・金堤市等が最大産地である。近年は慶尚北道の栄州市・奉化郡等も増加している。日本への主要輸出産地は、韓国南部地域の慶尚南道の産地が多い。

韓国におけるすいかの栽培面積は減少しており、これは、トマト(韓国では果物として販売されている)、オレンジ等の代替果物の増加により消費量が減少したこと、2002年、2003年の出荷時期の天候不良等による消費不振があったこと等による。

2003年の作柄は、播種、定植時期に低温、日照不足となったことから、生育不良により、収量が減少し、品質もよくなかった。2004年の日本輸出用のすいかは、播種が2月であるため調査実施時には作付けされておらず、調査実施時は、韓国国内へクリスマスから年末に出荷するすいか慶尚南道で栽培されていた。

日本への輸出は、韓国全体のすいか生産量と比較すると極わずかであり、また輸出用は日本品種ではなく、韓国品種を栽培している。主な産地では、輸出を計画的に行うという意識はなく、条件が合えば日本市場へ出荷するというものがほとんどである。



資料：独立行政法人農畜産業振興機構「V I N A S」、原資料：財務省「貿易統計」  
東京都中央卸売市場「市場年報」

## 産地の概要

### 1.きゅうり

本調査では、きゅうりは慶尚南道晋州市・光陽市及びきゅうり試験場にてヒヤリングを行ったが、いずれの地域でも日本輸出用品種の栽培は減少傾向にあった。

#### ・作柄状況

2002年11月～2003年2月の作柄は、寒さが例年になく早く到来したこと等によりよくなかった。2003年の調査時点では、台風の被害があった地域もあったが生育は平年並みであった。

#### ・栽培状況

品種は両産地ともシャープ301を使用し、単収は20kg～30kg/坪。播種時期は8月の下旬から9月の月上旬、定植は播種から1ヶ月後に行い、収穫は10月中旬から翌年1月末～2月末であった。施設は連棟ビニール温室で、面積1,000～1,050坪、軽油による温風暖房で加温を行っている。

日本側から要求されている栽培基準、農薬基準を守るためにできるだけ農薬を使用しないようにしている。

#### ・生産コスト

両産地とも経費のうり、最も大きいウェイトを占めているのは光熱費、次いで種苗代であった。労働力は基本的に夫婦2人で行っている。

#### ・輸出動向

両生産者とも農協の会員であり、農協が貿易会社と契約を結んでいる。生産者は全量農協へ出荷し、規格に合ったものを輸出し、規格外を国内市場へと出荷している。

#### ・今後の動向

日本市場における野菜価格の下落、韓国側の国内市場価格の上昇、農薬基準の厳格化と防除履歴の開示等による栽培管理作業の負担が合まって、近年急激に輸出向けの生産量が減少していることから考えると、今後も減少傾向は変わらない模様である。

また、日本輸出用品種に限らず、韓国におけるきゅうりの栽培が他の作物と比較して労働力がかかることから減少傾向にあり、高齢化がより進む状況下において、今後も生産量は減少傾向で推移するのではないかと、きゅうり試験場ではみている。



上 慶尚南道大谷郡 品種：シャープ 301  
 右 同産地の土耕栽培の様子



きゅうり試験場の実験の様子

上 全羅南道光陽市 品種：シャープ 301  
 台風被害により葉にベト病やウドンコ病の斑点が出てしまっている。

## 2. トマト

本調査ではトマトは、全羅南道羅州市、全羅南道金海市、慶尚北道永川市において調査を行った。

### ・ 作柄状況

2002 年の作柄状況は平年並みであった。2003 年は、全羅南道の金海市の産地で台風により、ビニールハウスの倒伏、浸水等の被害を被ったが、調査実施時には既に復旧を終え、生育は平年並みであった。

### ・ 栽培状況

品種はサンチェリー、サンタ、カメレオンであった。昨年度の調査時まではほとんどココ、ペペであったが、ココ、ペペより大果となるサンタ、カメレオンに一部転換されていた。日本向け輸出よりも、韓国国内の嗜好にあわせた品種選択を行っていると言測される。

単収は 60kg～70kg/坪。播種時期は 6 月から 7 月の月上旬、定植は播種から約 1 ヶ月後に行い、収穫は早い産地で 9 月下旬から翌年 6 月、2 期作を行っている産地では 12 月下旬から翌 5 月であった。施設は全ての産地において、連棟ビニール温室、面積 500～1,100 坪、加温の燃料は軽油を使用している。

受粉はマルハナバチを使用している産地が多かった。

全ての産地で農薬は使用していないとのことであった。

### ・ 生産コスト

両産地とも経費のうち、最も大きいウェイトを占めているのは光熱費、次いで種苗代であった。労働力は基本的に夫婦 2 人で行っている。

### ・ 輸出動向

生産法人もしくは農協が輸出業者と契約しており、取引輸出業者はどの産地も 1 社のみであった。輸出単価は、定額で年一回の交渉により決定する場合と、日本市場及び韓国国内市場の価格動向により両者の話し合いで決定する場合の 2 通りであった。

### ・ 今後の動向

韓国国内価格が輸出価格を上回って推移したこと、また栽培品種が韓国国内の嗜好のものを採用している産地があったこと、慶尚北道の産地は 2002 年までは輸出していたが 2003 年は輸出を取りやめたこと等により、日本への輸出は減少傾向で推移すると思われるものの、産地では日本は重要な出荷先であるとの認識は依然として高いことから、国内価格と輸出価格の動向により輸出数量は、今後も増減すると思われる。



光州市産地組合の集出荷場に積み上げられた日本輸出陽ミニトマトの段ボール箱



収穫されたミニトマト  
品種：サンタ



ビニール温室内の栽培風景



ビニール温室の外観



収穫作業風景



養液栽培の様子

### 3. パプリカ

本調査ではパプリカは、全羅北道金堤市、忠清北道益山市、全羅南道大谷郡・和順郡・大谷郡、慶尚北道陝川郡にてヒヤリングを行った。

#### ・作柄状況

2002年11月～2003年7月の作柄は、冬期における日照不足等天候不良によりよくなかった。2003年の調査実施時は、収穫初期であったが、慶尚南道南部地域では平年並み、全羅北道では11月の日照不足により2、3段目に落果が多発していた。

#### ・栽培状況

品種は、オランダデライト社もしくはエンザ社のものをほぼどの産地も採用していた。赤色はスペシャルが一番多く、他にジュビル、プレんティ等、黄色はフィエスタがほとんどで、他にドービー、オレンジはブーギーであった。赤色は、以前はスピリットが多く栽培されていたが、新品種のスペシャルと比較して裂果が多いこと等の理由により、急激にスペシャルが普及した。黄色のフィエスタは世界的にもシェアが80%以上と言われている。色別では赤色が全体の5～7割、黄色が3～2割、オレンジが1割の構成である。

単収は栽培技術により差があるが40kg/坪から最高で70kg/坪である。単収はオランダより低いが、冬越しをする作型であるので70kg/坪は多いと言える。

作型は促成栽培がほとんどで、播種時期は7月8月上旬、定植は播種から1～1ヶ月半後に行い、収穫は11月～翌年7月末が多く、慶尚北道陝川郡の高冷地栽培では播種1月上旬、定植3月上旬、収穫時期6月上旬～12月中旬の作型であった。

施設は促成栽培では、ほとんどがガラス温室で、施設面積は1,000坪～3,000坪、連棟両屋根型、もしくはフェンロー型であった。韓国の施設面積は幅35～36m、奥行き100mが多く、これは水田の跡地に施設を建設したためである。また、韓国南部地域にある夏場の産地ではビニール温室も多く使用しているとのこと。今回は、全羅南道和順郡において連棟ビニール温室、施設面積2,600坪を調査した。

加温は軽油による温風暖房がほとんどで、中には重油を使用しているものもあった。

栽培技術指導は、オランダ、ベルギーなどから技術者を招いて月に1～3回行っている。

パプリカ生産者は、他の輸出品目生産者と違い、栽培管理に対する意識が高く、日本企業側から求められている農薬基準を守るための対策が実施されており、農林部と国立農産物品質管理院で作成した「輸出パプリカ安全性管理指針」を配布して栽培管理を徹底して行っている。

#### ・生産コスト

全ての産地において、最も経費がかかるのは光熱費、次いで種苗代、肥料代であった。

#### ・輸出契約

輸出の契約形態は、農協が窓口になっている場合と、生産者が組合法人を設立して行っている場合の2通りであった。両者とも規格品を日本へ輸出し、規格外品を韓国市場へと出荷していた。出荷量に対して、規格外品が出る割合は大体10%弱であり、調査した生産者団体には規格外品を韓国国内の販促活動に用いているという報告もあった。

契約方法は、数量や面積により固定して契約しているのではなく、過去の実績をもとに大体の数量を把握し、実際に輸出する数量は、月、旬、週単位に双方連絡を取り合いながら調整を行っている。

調査を行った産地は、全て釜山港から輸出し、下関港、もしくは博多港に入荷していた。生産者が収穫した後、共同選別場で選果を行い、5kg段ボールに詰め、トラックにより釜山港へ運んでいる。

#### ・今後の動向

2002年は、冬に日照不足があり作柄が不良であったとの報告が多かった。2003年度は11月に中北部で日照不足による落果があり、2、3月に数量が減るのではないかとの見解があったが、概ね良好であったこと、2003年の輸出単価も2002年と比較して上昇したこと、また、本調査の聞き取りで、栽培技術の向上により単収が増加しているとの報告が2産地であったことから、全体的な面積増加はなくても生産量はやや増加すると思われる。

韓国におけるパプリカの消費量はまだ少ないものの、スーパー等ではかなり高値で売られており、生産者、組合法人等も国内市場の拡大の可能性を指摘していた。またピザや西洋料理の需要も今後増加すると考えられることから、国内市場の需要が増加するものと予想される。

パプリカ生産者は、他の輸出品目の生産者と比較して、特に日本の安全基準を意識し、遵守していた。これは、2003年4月にパプリカの残留農薬問題が生じて以降、韓国農林部、国立農産物品質管理院がパプリカ生産者を登録制とし、農水産物流通公社がIDを発行したことによるものと思われる。



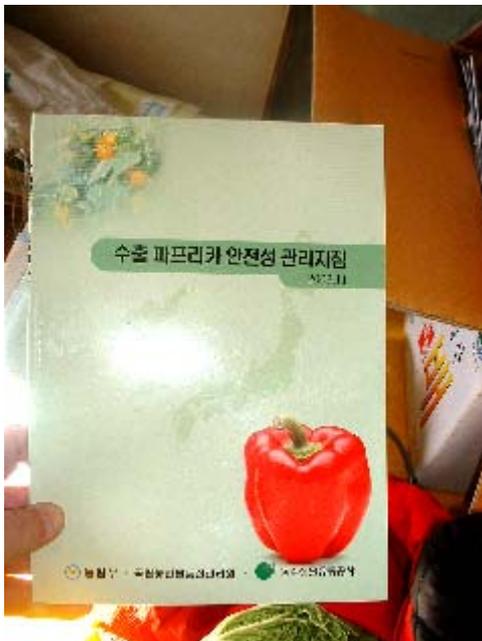
IDは「 (登録年度) - (品目) - (業者) - (契約栽培者) - (農家)」の情報が掲載されている。



連棟ガラス温室による栽培風景



品種：ブーギー



「輸出パプリカ安全性管理指針」



トラックに積載して釜山港へ運搬

#### 4. すいか

本調査時においては、日本におけるすいかの輸入時期が4～6月で、調査地において輸出用の栽培が行われていなかったことから、輸出用のすいかを見ることはできなかったが、韓国国内出荷用のすいかを慶尚南道大谷郡にて視察した。

当産地では、すいかの輸出を行った実績はないものの、同じ慶尚南道の他の産地ではすいかの輸出を行っており、4年前から輸出を行っているものの、減少傾向とのことであった。

##### ・作柄状況

2003年の冬期に雪が多かったため、日照不足により生育状況はかなり悪かった。

品質の低下等があり、日本への輸出は規格にあてはまらず、行われなかった。

##### ・栽培状況

単棟ビニール温室の多重被覆による保温によって土耕栽培を行っている。

##### ・輸出動向

農協が貿易会社と契約を結んでおり、生産者は全量農協へ出荷している。

日本への輸出規格は大きさが10kg/2個で糖度12度以上であり、全出荷量に対して輸出量は5%である。

##### ・今後の動向

栽培面積の減少、栽培品種が韓国品種で日本の品種と異なること、2003年4～6月の韓国国内市場価格が高く推移したこと等から輸入数量が増加することはないと思われるが、ある農協ではパンフレットを作成して日本で広報活動を展開しており、また以前に「甘すいか」の糖度12度以上のすいかは日本で好評であったことから、日本の市場価格によっては輸入される可能性がある。



単棟ビニールハウス外観



品種：タンビ（韓国品種）



#### 4 重被覆のビニールハウス

##### [その他の動向]

日本への輸出野菜のうち、トマトは既に登録制であったが、2003年4月に残留農薬問題が発生して以降パプリカも登録制となり、今後、全ての品目を対象とする予定となっている。

また、パプリカは、2004年にトレサビリティを導入する予定である。栽培管理の充実を図るために、輸出業者と生産者を契約による計画的な生産が必要であり、農水産物流通公社が両者の紹介等をして調整を行う予定であった。

いちごは、育成者権のロイヤリティ問題で輸入数量が減少した。これに対して韓国では、独自に新品種として「メイヒャン(莓香)」と「チョウホウ(早紅)」の育成に成功した。しかし、現在韓国では、都市部を中心としてレッドパールが70%、章姫が20%、と日本品種の人気が高く、まだしばらく韓国品種の普及には時間がかかるとのことで、生産量が急激に増加することはないものの、栽培面積は増加しており、天候次第では、過剰生産になる可能性もあるとの意見もあった。



慶昌南道にある土耕栽培によるいちご



韓国新品種：莓香(メイヒャン)